

研究ノート

## 1964年東京大会におけるオリンピックボランティアから得たもの — 学生ボランティアとして参加した上野純子名誉教授インタビューから —

堀 彩 夏 (日本体育大学 期限付一般研究員)  
依 田 充 代 (日本体育大学 スポーツマネジメント学部)  
波多腰 克 晃 (日本体育大学 スポーツ文化学部)  
清 宮 孝 文 (静岡産業大学 スポーツ科学部)  
齋 藤 雅 英 (日本体育大学 スポーツ文化学部)

### はじめに

本稿は、オリンピックボランティア、スポーツボランティアに関する調査として、1964年第18回オリンピック競技大会東京大会（以下、1964東京大会）開催当時、学生ボランティアに参加した上野純子名誉教授（以下、上野先生）にインタビューを実施し、その内容をもとに作成したものである。インタビューは、2020年11月25日に行った。なお、本調査は、日本体育大学倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：019-H082）。

### 1. 日本体育大学と1964東京大会

オリンピック・パラリンピックでは、これまでも多くのボランティアが参加し、大会の開催に大きく貢献してきた。布村（2018）は、2012ロンドン大会ではボランティアを含むスタッフを「Games Maker」と呼んでいたことなどを踏まえ、「大会成功の担い手」として責任感をもって生き生きと役割を全うすることが重要であると述べている。さらに布村（2018）によれば、1964東京大会においても、語学サービス等のボランティアで学生が大きく貢献していたという。

1964東京大会では、日本体育大学の学生も学生ボランティアとして多く参加していた。上野先生は1964東京大会に学生ボランティアとして参

加した経緯について、「多分、全員協力するという体制だった」とし、池田敬子名誉教授の呼び掛けを受けて、「国の大仕事なんだから、そうか、当然やるんだと思って参加したんですよ」と振り返る。学生ボランティアとしての参加が決まっただけから、全体の説明会があり、支援する意義や各部署への割り当てについて説明があったという。日本体育大学では、「日体生らしく」礼儀正しく清潔にすること、割り当てられた部署の方からは、「こういうことだけは気をつけてください的なこと」や英語について説明を受けた。上野先生は柔道と競泳の競技会場に割り当てられ、「場内整理係」に従事した。当時、身分を証明するID等の配布はなく、学生ボランティアには入場券目録が配布された（写真1）。

### 2. 1964東京大会でのボランティア経験

柔道と競泳の競技会場で場内整理係に従事した上野先生は、何でも楽しむという「人生主義」で、1964東京大会での学生ボランティアに勤しんだ。

私は昔から何でも面白がってやるという趣旨なんですけど、でも一緒に行った人は、何やんのか壁に寄っかって、何これとか早く終わればいいねとかね。文句を言う人もいましたけど、私は何でも面白くて、「なんで、こんな経験めったに



写真1 1964東京大会の入場券目録

ないじゃない」と言って楽しんでました。

試合中には観客の出入りが少ないため、試合を見ても良いという指示があり、上野先生は試合中、行われている試合や観客を眺めていたという。その中で上野先生は、現在でも印象に残る場面に遭遇した。優勝を期待された柔道選手が敗戦し、上野先生は場内整理を再開しようとしていたところ、その選手がすぐ側のドアから「号泣しながら出てきて」、別競技のトップアスリート2名から肩を抱かれ「あなたはよくやりましたよ、頑張っていましたよって」慰撫されていたという。トップアスリートの歴史的な一戦とその裏で繰り広げられた情景は、学生アスリートであった上野先生にとって印象深いものであった。

清宮ほか(2020)は体育系大学生のスポーツボランティアへの参加意欲の要因について、退屈からの逃避やリラックス効果、気分転換などの認識をもつことで参加意欲は向上し、反対に義務的に参加するものという認識は参加意欲の減少につながることを明らかにした。また、元嶋・杉山(2022)はスポーツボランティアに関する研究のレビューを通して、他律的もしくは利己的な参加動機であっても、活動を通して楽しさや満足感、報酬を得られることで参加・継続意欲が高まると考察している。上述した通り、上野先生の学生ボランティ

アへの参加は「多分、全員協力するという体制だった」という義務的な始まりであったが、「場内整理係」のなかに面白味を見出していたことがわかる。さらに、上野先生は「場内整理係」としても印象的な経験をした。

ある時ロシア人の人がいて、全然違うところに座ってたんですよ。そこはちゃんと観客が来るところ。ですから英語で一生懸命「Excuse me」とか言って、ここはもう決まっていますので言ったら「おい、ここ違うってよ、行こうぜ」と日本語で言って、がくっときたことがありますね。

事前の説明会では、英語について教授されたが、「こっちですよ、とか。Please sit downみたいな感じで」と簡単な英語だけだったという。そのような中、「場内整理係」として外国人に対して英語で説明をし、伝わるという経験をされた。上野先生は、思い出されるエピソードとして、「褒められましたね。日体生よくやってるって。」と施設の職員に褒められた経験を語られた。桜井(2005)は、若年層のボランティアにおいて、社会的役割が得られる実感や自身の成長が促されている実感を持てる活動であることが活動の継続に重要であると述べている。上野先生は、成し遂げ

柔道 JUDO JUDO					
国立総合体育館本館 Gymnase National National Gymnasium					
日月 Date	競技時間 Horare Time-table	等級 Classe Class	料金 Prix Price	券種番号 Répertoire Code No.	
20/10	通し券 Tous les tickets	A	¥12,000	3401	
23/10	All tickets	B	8,000	3402	
20/10	A	13:00	SPECIAL	3,000	3410
		19:00	I	2,000	3411
			II	1,000	3412
			III	500	3413
21/10	A	13:00	SPECIAL	3,000	3420
			I	2,000	3421
			II	1,000	3422
			III	500	3423
22/10	A	13:00	SPECIAL	3,000	3430
			I	2,000	3431
			II	1,000	3432
			III	500	3433
23/10	A	13:00	SPECIAL	3,000	3440
			I	2,000	3441
			II	1,000	3442
			III	500	3443

60

レスリング LUTTE WRESTLING					
駒沢体育館 Gymnase de Komazawa Komazawa Gymnasium					
日月 Date	競技時間 Horare Time-table	等級 Classe Class	料金 Prix Price	券種番号 Répertoire Code No.	
11/10	通し券 Tous les tickets	A	¥26,000	3501	
19/10	All tickets				
11/10	A	11:00	I	1,000	3511
			II	500	3512
			III	300	3513
	N	18:00	I	2,000	3516
			II	1,000	3517
			III	500	3518
		22:00	IV	300	3519
12/10	A	11:00	I	1,000	3521
			II	500	3522
			III	300	3523
	N	18:00	I	2,000	3526
			II	1,000	3527
			III	500	3528
		21:00	IV	300	3529

61

写真2 上野先生がボランティアとして従事した柔道の競技日程（入場券目録p.60）

たことや褒められたことで学生ボランティアとして他者の役に立つという感覚が得られたのではないだろうか。

### 3. 1964 東京大会後のボランティア経験

1964 東京大会後、上野先生はさらに学生ボランティアの活動に参加した。駒沢公園で開催された障害のある人が参加した大会でボランティアとして会場整理や設営に従事した。参加するきっかけは「誰かが持ってきたんでしょうか。学生同士かわかりません」と1964 東京大会のように「全員協力する」大会ではなく「それは本当のボランティアですね。今の言葉でいう」大会であった。

やっぱり障害のある人もそうだよなって思っていて、やり方によっては障害のある人もいろんなことできるんだから。障害のある人のできることをみんなで競い合って高めていけば、障害のある人がもっと幸せに暮らせるのかなというふうに思ったことですかね。より生活の、人生に幅が広がって、それをやるんだったらすごくいいじゃないっていうふうな感じで行ったと思いました。あの時は。

上野先生は、1964 東京大会のボランティア後、

障害のある人も競い合って高めていけばさらに幸せに暮らせると考えた。障害のある人が参加した大会でのボランティアでは、場内整理のほか、参加者が困っていたら手伝いをすることもあった。

その時は、気になったことは全部やっていいからって言われたような気がして、自分が気づいて、例えばあの人1人でいるからどうしたんですかとか、押しますよとか、車いすをととか、困ってることないですかとかって感じてやりましたね。

あんまり障害のある人見ても、何かってというのは大学3年まではなかったのが、きっかけとしてやっぱり障害のある人、何かあるかなとか、何か助けられるかなとか、助けるというのはなんか上から目線ですけど、当時はそう思っていましたね。だから何か協力体制があればすぐ行くと。そういう意識が変わっていったことは確かですね。

学生アスリートとしてスポーツに関わっていた上野先生は、これまでに触れてこなかった障害のある人が参加するスポーツ大会でのボランティア経験を「すごい意義があるんじゃないかっていうふうに、そのとき思ってたような気がしますね」と振り返る。

#### 4. 学生ボランティアの経験からつながるキャリア

体育教師を目指していた上野先生は、大学3年生で学生ボランティアに従事したことで意識が変化した。上野先生が大学3年生時に日本体育大学ではゼミ活動が開始されたということで、上野先生は正木健雄名誉教授のゼミを受講した。そこで血圧や脈の変化についての個人差や健康の指標として用いることが可能であることを学んだ。

これを将来職業につなげていけば、(中略)障害のある人とかああいう人たちに役立つかもしれないと思って、それで研究者になりたい、どうしたらいいですかって正木先生に聞いたら「大学院に行くことですかね」と仰るんですよ。それで「大学院って何ですか」って聞いたら、「ただ、今体育は東京教育大と東大しかないよ」って。「じゃあ私、東大に入ります」とか、そのとき宣言しちゃったんですよ。ところが基礎学力はない、落ちこぼれだしていうので「いや、でも無理ですね」って言ったら、「いやいや、人が入ってるんですから、入れないことないですよ、日体出たって」って言われるんですよ。よし、じゃあやってみようかってその時思っただけ。

学生ボランティアとして参加し、初めてパラスポーツに触れて感じたことと日本体育大学での学びとを結びつけた上野先生は、東京大学大学院への進学を決意した。3年間の猛勉強の末、東京大学大学院に合格し進学した。入学後は、小児保健を専門とする教授のもと、研究室での療育園見学等の活動を通して子どもについて学んだ。そのなかで、障害のある人の障壁を研究者としてどのように取り除いていくことができるかという問いのもと研究活動に励んだ。その後、日本体育大学で助手や講師を経て、教授として名を残した。上野先生にとって1964東京大会は世界に目を向ける

きっかけとなった。また、上野先生は自身の目で確かめたいと「大きくなったら絶対留学したい」と考え、ウィーン大学で1年間在外研修も経験した。日本体育大学での奉職中にも、母親が入所した老人ホームで入所者との話し相手としてボランティア活動を行った。様々な場面でのボランティア経験から、ボランティア活動をしている人への配慮や支援を受ける方がどうすればよりよく生活できるかという点を考えられるようになったと話し、上野先生ご自身の世界が広がるきっかけとなった。

最後に上野先生は、学生ボランティアについてこのように語った。

できるだけいろんな人と話して、そして世界にいろんなことが起こってて、ただ目の前だけじゃなくて、世界に起こってることをしっかりと知るだけじゃなくて、理解をして、自分はどうしたら、なんかでも役に立てることが将来できるかっていうことを考えなさいって、この機会に言いたいですね。

清宮ほか(2021)は、体育系大学生で最も多いのは、スポーツボランティアをクラブ・サークルやゼミ活動から依頼を受けて行うものと捉え、社会にも自分自身にもメリットがないとイメージしている「義務型」の学生であることを明らかにした。しかし、学生ボランティア活動は、学生生活のなかで触れる機会の少ないスポーツや活動、コミュニティに触れるきっかけとなる。また、学校で学んでいる内容と結びつけ、自分に何ができるかという視点を持つことで自身の将来について考える機会にもつながるのではないだろうか。特に体育系大学生がオリンピックボランティアやスポーツボランティアとして参加する際には、上野先生のような何でも楽しむ人生主義、積極的関与の姿勢の重要性について伝えることが必要であると考えられる。



## おわりに

上野先生にとって1964年東京大会へ学生ボランティアとして参加した経験が世界へ目を広げるきっかけとなったように、オリンピックボランティアは学生生活のなかでは経験しがたい経験が期待される。また、体育系大学生として専門競技や勉学に励む学生にとって、これまで触れてこなかった種目やパラスポーツを知るきっかけや、学校での学習と結びつけて学びを深めるきっかけとなる可能性がある。これらは、強制的・他律的にボランティアへ参加するのではなく、積極的関与や「何でも楽しむ」といった姿勢によって得られるものと考えられる。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（2016）が多様な参加者の活躍促進を掲げていることもあり、1964年東京大会のように全学生が参加するのではなくより参加意欲の高い学生が参加する状況であるが、2020年東京大会でも多くの学生がボランティアとして参加した。日常的にスポーツに関わる体育系大学生にとっては、オリンピックボランティアやスポーツボランティアにおいて積極的関与の姿勢で臨むことが人間的成長の機会となる可能性がある。

## 文献

清宮孝文・門屋貴久・依田充代・阿部征大（2020）

スポーツボランティアに対する認識と参加意欲の関係性：体育系大学生に着目して。運動とスポーツの科学，26（1）：31-44.

清宮孝文・依田充代・門屋貴久・阿部征大（2021）体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化：スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して。日本体育大学紀要，50：1019-1029.

元嶋菜美香・杉山佳生（2022）スポーツボランティアの参加・継続要因に関する研究動向：定義と活動実態の乖離に着目して。生涯スポーツ学研究，19（1）：27-36.

布村幸彦（2018）東京2020大会とボランティアそして大学連携。ボランティア学研究，18：31-34.

桜井政成（2005）ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異。ノンプロフィット・レビュー，5（2）：103-113.

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（2016）東京2020大会に向けたボランティア戦略。東京都公式ホームページ <https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodo-happyo/press/2016/12/15/04.html>（2023年1月10日閲覧）

（受理日：2023年2月26日）